

日本キリスト教会大阪北教会

2016年12月11日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ルカによる福音書1章57～80節

01:57 さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。 01:58 近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。 01:59 八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。 01:60 ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。 01:61 しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、 01:62 父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振りで見せた。 01:63 父親は字を書き板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。 01:64 すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。 01:65 近所の人々は皆恐れを感じた。そしてこのことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。 01:66 聞いた人々は皆これを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。 01:67 父ザカリアは聖霊に満たされ、こう預言した。 01:68 「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、 01:69 我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。 01:70 昔から聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。 01:71 それは、我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い。 01:72 主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。 01:73 これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。こうして我らは、 01:74 敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、 01:75 生涯、主の御前に清く正しく。 01:76 幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、 01:77 主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである。 01:78 これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、 01:79 暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」 01:80 幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒れ野にいた。

説教 『高い所からあけぼのの光われらを訪れ』

◆今年12月25日が日曜日です。この日に私たちはクリスマス礼拝を行いません。そして今、クリスマス・降誕節を待つ待降節の時を過ごしています。それで私たちが救い主と信じるイエス様はこのようにクリスマスを皆が祝うことを喜んでおられるでしょう。しかし、イエス様の思いはもっと別のところにあるのではないかと、私は今賛美歌を歌いながら思いました。「クリスマス」の意味は「キリストを拝む」ことですね。そしてこれはキリストの御誕生を祝う祝祭日であります。しかし、この世界は広く、今日誕生する赤ちゃんも一杯いるわけです。一日に何十万の赤ちゃんが生まれ、昨日、生まれた赤ちゃんも世界には一杯いるわけです。毎日、毎日生まれる赤ちゃんは一杯いるわけです。その誕生を私たちが本当にお祝いする。そういうことをイエス・キリストご自身が切望しておられると思います。そしてそのようにして生まれた子が、すぐに飢餓によって、内戦によって、命を落とすことも日常茶飯事になっているわけであります。日本では、親が子を死に至らせることが、毎日報道されています。一つの命を本当に大切にします。

かけがえのないものとする。そういう思いなしに、クリスマス祝うというのであるならば、キリストは「そんなクリスマスは結構だ」と、そうおっしゃるのでないでしょうか。

◆そう申しますのは、今日の箇所には、イエス様より6か月早く生まれた親戚のヨハネの生後八日目の祝いの事が書かれております。59 節に「八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした」とあります。ユダヤ人は生れて八日目に「割礼」を施し、命名いたします。私たちクリスチャンですから「割礼」から縁遠いのですが、「割礼」は、神様とイスラエル先祖・アブラハムとの間の「契約の印」なのです。当時アブラハムは 99 歳の超老人になっています。妻サライは 10 歳若く 90 歳です。その年まで子どもがありません。今日の箇所に出てくるザカリア・エリザベツよりも 30 歳位高齢でしょうか。そんなアブラハムに神が臨まれ、イサクの誕生を告げられます。けれどもアブラハムもサライも笑って信じようとはしません。しかし御告げのようにサライは身ごもり、「イサク」を産むわけです。その時、神様はアブラハムに、私とあなたとの「契約の印」として、「割礼」を施すことを求められたのです。そしてアブラハムをはじめ、一族の者達、家の僕たちも全て、その日、割礼を受けるのです。

◆そして今日のヨハネの割礼へと来るわけです。私は先日来、聖書は「テストメント」、「遺言」という意味なのだということを繰り返し申してきました。自分に対する遺言であるならば、そこに何が書かれてあるかということに無関心である人は一人もいないと思います。しかし私たちは聖書を「遺言」を読むように読んで来なかったと思います。そして今日の箇所における「割礼」なんていうことは、クリスチャンには無意味である。それはユダヤ人の習慣だ。そういうことで私たちは済ませて来たと思います。けれども私は、「割礼」は正に神様が百歳近くなったアブラハム・サラ夫妻に、あなたがたに男の子を授けると告げられ、それが実現したわけです。そして名前は「イサク」です。「笑う」という意味です。彼らはその御告げを聞いた時笑ったのです。そんな事はあり得ないと。ところが本当にイサクが与えられたのです。神様の御告げに対する不信の笑い。そのような者に本当に子どもを与えてくださる神様の恵みを覚え、彼らは喜び笑うのですね。

◆今日の箇所のザカリアは、エルサレム神殿での祭司です。生れた子どもはヨハネと名付けなさいと、これも御告げだったのですね。いよいよ生まれて八日目の割礼の日が来て、この日に命名するわけです。親戚の者たちは父の名をとって、「ザカリア」と名付けようとしています。「ザカリア」という名は、あの「取税人ザアカイ」の名前です。「ザカリア」の砕けた形です。ザカリアが本来の形で、「主は覚え給う」という意味です。因みに「エリサベツ」は「神が誓い給う」の意味です。神様が一度、約束されれば、人間的にどんな不都合があっても、神様はその約束を実現し給うという事がこめられている名前です。親戚の者たちは、この良い名前、父の名を取って「ザカリア」と付けようとした。ところが母エリサベツは、「いいえ、名前はヨハネとしなければなりません」と、きっぱり言います。これはザカリアが神殿で奉仕をしている時、御告げがあり、御使ガブリエルは言います。19 節。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者、あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話をするができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉

を信じなかったからである。」このように御使いが語ると、ザカリアは即座に口が利けなくなり、御使いは勝手なことを言っているのではなく、神様が伝えなさいと言われたことを伝えているのです。神様が伝えなさいと言われる御言葉は必ず実現するのです。◆そして十か月の経過があって、そして今日のところに来るわけです。そして親戚の者たちが集まって来て名を付けるのですね。高齢になったザカリアの名をつけようとしますが、まず妻のエリザベトが「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言います。そして口がきけなくなっているザカリアに聞くと、彼も、「この子の名はヨハネ」と答えます。ザカリアは年老いて、引退間近になっていました。高齢者だということです。歌舞伎界の襲名披露のように、先代の名を子どもや弟子が襲名させる。その名を子どもにつけようとするのですけれど、神様の御告げは「ヨハネ」なのです。「ヨハネ」は「神の恵み」という意味です。これはヨハネの場合で、アブラハム 99 歳になって子どもを得るということは全く考えられない時に、神様が子を授けてくださったのです。そのことの「契約の印」が「割礼」だったのです。従って、「割礼」の持つ意味は甚大であります。つまり、人が生まれるということは、人間の力によるのではない。マリアの場合は結婚する前にイエス様を身ごもりました。そのことは、今どきは、誰も驚きません。ざらになっていますね。しかしそれは男と女の間で生まれたわけです。しかしマリアの場合はそうではありません。そしてザカリア・エリザベツの場合はもう高齢者です。アブラハムとサラの場合は、超高齢者です。ひいおじいちゃん、おばあちゃんの世代になりますね。そういう超高齢者が御告げの通りに子どもを産むのです。これは人間業ではありません。神様の御意思以外では生まれません。

◆そこで申し上げたいのは、この世に生を受けた者で、神様の御意思によらないで生まれた者は一人もいない、ということです。という事を「割礼」は言っているわけです。そしてこの世界で、毎日、何十万の子が生まれるのです。それはイエス様の誕生と比べても遜色はない。イサクと比べても遜色はない。ヨハネと比べても遜色はない尊い命なのです。その命をわたしたちは本当に自らのこととしても大事にする。人の子としても大事にする。よその国の人としても大事にする。そういうことの伴わないクリスマスというのは、これはもうナンセンスです。そのような次第で、わたしも「割礼」なんてことは我々と無縁で、ユダヤ人のしきたりとしてきましたけれど、「割礼」に込められたメッセージは、計り知れないものがあります。アブラハムがおり、イサクがおり、それがなければイエス様の誕生もあり得ない。ヨハネの誕生もあり得ない。ただイエス様だけが、処女マリアから生まれたとしても、全ての人々が神様の力によって、御意思によって生まれた人間でない者は一人もいないのだということです。そのような事でありまして、今日の箇所は大分長く読んでいただきまして、読むべきところはいくらもあるのですけれども、正に「割礼」こそ、神様の約束の成就の印なのです。そしてザカリアとエリザベツの老夫婦にヨハネが与えられました。わたしたちは先週マリアの賛歌を読みました。今日はその父親「ザカリアの預言」となっていますけれども、これはザカリアに賛歌です。78 節からよみましょうか。「これは我らの神の憐みの心による。この憐みによって高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、闇と死の陰に座している者たちを照らし、我ら

の歩みを平和の道に導く。」これはアブラハムと神様との契約、誓い、約束に触れないとザカリアの賛歌は理解できないのですけれども、今読んだ最後の 79 節。ザカリアとエリザベツには子どもがなかったのです。あなたがたからたくさんの王が誕生すると言われているのです。アブラハムは、その時、名前を変えなさいといわれているのです。「アブラム」を「アブラハム」に。そして妻「サライ」も「サラ」に。アブラハムは「国民の父」の意味。サラは「女王」の意味。そういう「アブラハムとサラ」の子孫であるのにザカリアとエリザベツに、子がなかったということは、神様の約束、祝福から除外されているという意味を持っています。ですから、ザカリアとエリザベツはずっとそのことで祈ってきたわけです。「暗闇と死の陰に座している者たち」とは、ザカリアとエリザベツ夫婦のことです。祈ってきたわけです。けれどもこの歳になってかなわなかった。あきらめるしかないのですね。ですから「暗闇と死の陰に座している者たち」は、いろいろな人がありますが、ザカリアとエリザベツ夫婦のことです。暗闇と絶望にしがみ込んでいた者。こういうふうに戻すとザカリアとエリザベツを表しますね。「暗闇と絶望にしがみ込んでいたわたしたちを照らし出し、わたしたちの歩みを平和に向けてまっすぐにしてくださるのだ。」(カトリックの本田哲郎さんの訳)。このように戻すとこれはザカリアとエリザベツの心を表します。暗闇と絶望にしがみ込んでいた、そういうわたしたちを平和に向けてまっすぐに立ち上がらせて歩むことを得させてくださるのだということ、ザカリアは心から感謝しつつ神様を讃えているのです。

◆そういう次第でありまして、ザカリア、エリザベツに与えられた恵み、アブラハムとサラに与えられた恵み、それが、私たち一人一人が継承し、与るべき恵みなのです。ですから今年のクリスマス、本当にクリスマスらしくお祝いしようと願うのであれば、私たちは自分自身の存在が、ただ神様のご意思による命なのだということを自覚することです。その尊い命が今日易々と失われている。それを傍観してのクリスマスは神様は喜ばれません。クリスマスのお祝いは後にして、そういう人の命を守りなさいというのが神様の御心ではないでしょうか。今日、安藤貞子長老のお嬢さん二人が見えています。私たちは死ぬことを天に召されると言います。この地上から天に昇るのです。鷲のような若さを新たにされて安藤輝男兄も天に召されたのですね。だから私たち、神様のご意思によって命を与えられた者は決して滅びることはないのです。地上にあってもこの上なく豊かな命を受け、地上の歩みを終えても、いよいよ神様の恵みに満たされて、若さに漲って天に昇ることができる。そういう命に生かされているのです。その事を我が事として、また他人事としても覚え、神様に喜ばれるクリスマスを迎えたいと思います。

◆お祈りいたします。

恵みに満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。本当に私たちは愚かな者であり、あなたの限りない途絶える事のない恵みから遠く離れて日々を過ごす者であることを懺悔いたします。しかしあなたはそのような者を常に顧みていて下さる事を覚え心から感謝いたします。どうか私たちの日々が、またクリスマスが、天に召された者たちと共に心からあなたの恵みに感謝し、主イエス・キリストの御名を讃えるものであらしめて下さい。この祈り主イエス・キリストのみ名を通しみ前におささげいたします。アーメン。